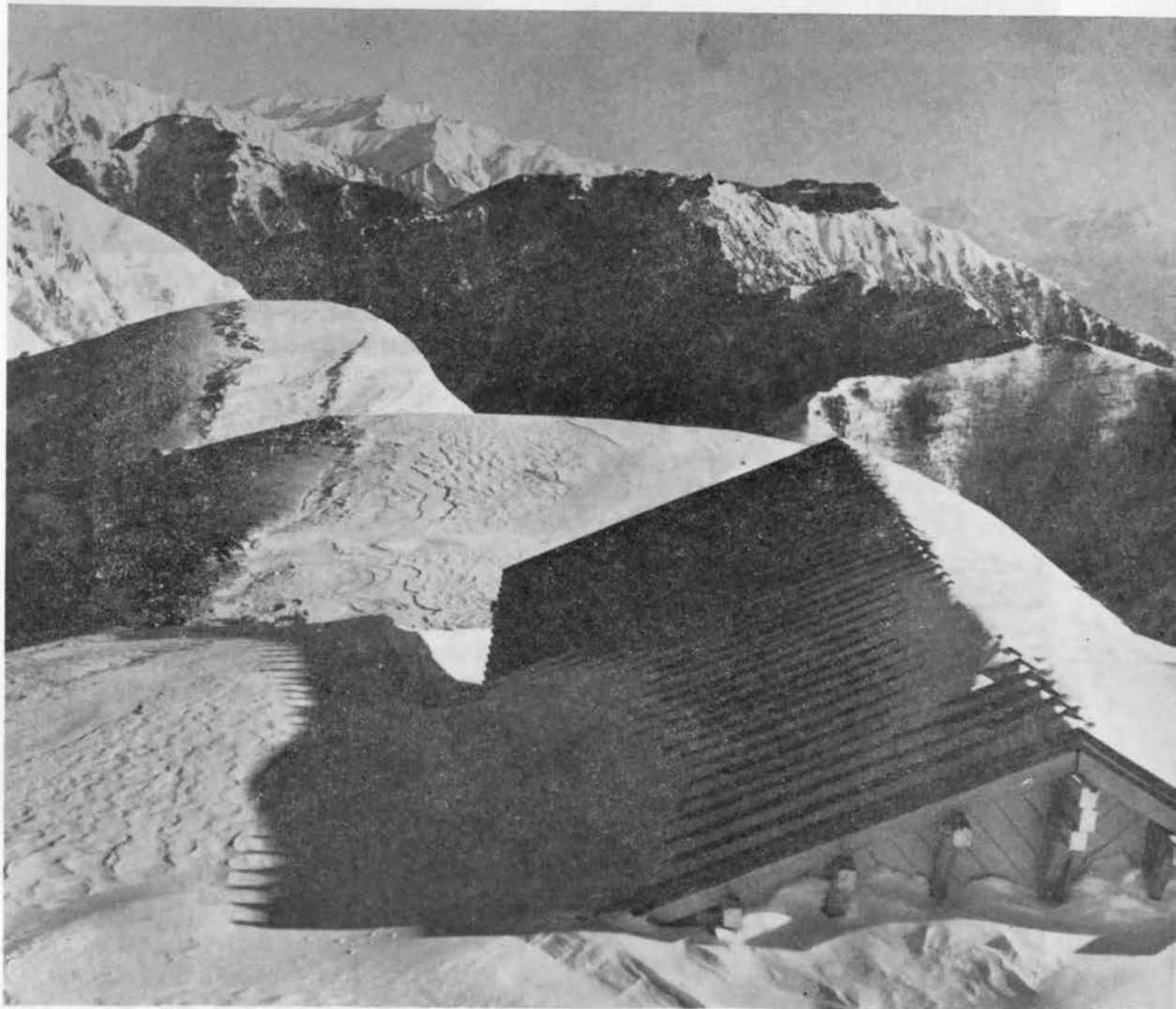


山と博物館

第3巻

第10号

1958年10月20日



山小屋と銀嶺

昭和電工大町工場

遠藤好一

銀色に輝く四方を眺めると小屋の眼下に築山を重ねたように、朝日に光った氷雪が小屋と対象し、いかにも女性的であり面白かったので夢中でシャッターを切った。手前に餓鬼岳、右方には雨飾山、焼山、火打山、左方には白馬岳、鹿島槍、爺ヶ岳、蓮華岳が淡碧の朝空に雪の姿を連ねている。高低起伏連綿とした壮大な山容はどうも私の腕にてとらえることができなかった。

大町山岳博物館

自然の神秘

雪を彩る

着色雪について

長野県白馬高等学校教諭 小野貞雄

つい最近まで緑一色に包まれた野山も、すっかり紅葉し、虚空にそり立つ日本アルプスの峰には、新雪に包まれ銀白色に輝いています。今年もまた里に雪の訪れる時節が間近に迫ってきました。この野山を埋めつくす雪の色はどんな色でしょうか、雪は白いものと決っていますが、ときには赤い雪や緑の雪が現われることがあります。

老翁の話や伝説に、「赤雪が降り、これを見た人は大いに驚き、天変地異でも起る前兆ではないかと大騒ぎになった」という話などがあります。

赤雪や緑雪は世界の高山やシベリヤの雪原に、また、極地などいつも雪に覆われている所に、しばしば現われます。わが国では長野県の高山や、尾瀬ヶ原、八甲田山などに発見されています。(写真1参照)

この赤雪や緑雪は普通の白い雪のように、決して空から降るものではありません。これはある種の赤色の藻類のごとき、微生物が冷たい水や雪を好んで繁殖するためです。このように、ある特殊な藻類や菌類、或は細菌類には、少なくとも生活史のある期間を水や雪の中を住所(すみか)として、好んで生活しているものがあります。このような微生物を氷雪植物、あるいは氷雪プランクトンといいます。

これらの微生物の中には体に、赤い色素や緑の色素をもっているものがあります。これが著しく雪の中に繁殖致しますと、その微生物特有の色を帯びて、そのために雪

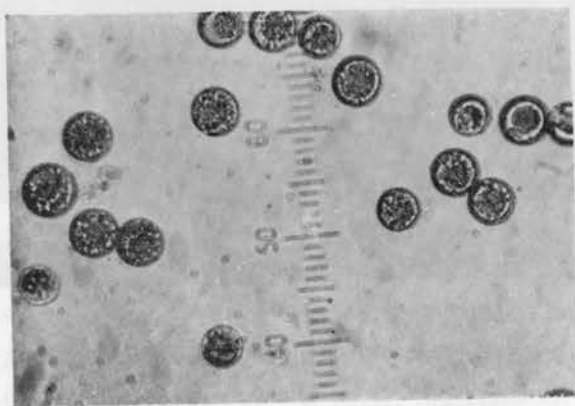


①雨飾国有林鎌池付近に発生する着色雪、手前の日当たり場所に赤カツ色系の赤雪が発生している(黒い部分)右の日陰の黒い部分は濃緑色暗緑色をした緑雪。

が赤く染ったり、緑に染ったりするのです。そして、その染る雪の色によって赤雪、緑雪、黄雪、黒雪などがあって、白雪に包まれた銀世界を彩り、登山者の目を楽しませてくれます。このように彩る雪には赤、黄、緑と色を帯びておられますので着色雪、又は五色雪、雪の花と呼んでいます。

この着色雪の中に住む微生物には、雪の中に好んで生活している固有の氷雪植物ばかりではなく、例へば海上の微生物が風などに飛ばされて来て、偶然にも雪の上に落ち仕方なしに住んでいるもの、或は雪や氷に封じ込められて死んだものも含まれて見いだされますので、一概に着色雪の微生物は氷雪植物とはいえないのです。又、赤く染っている雪も、場所によっては以上のような微生物以外に、土や砂、或は火山灰などが舞い落ちたり、地面の鉄分が雪にしみ通り、又、鉄分を含んだ雨水などによって染った雪も所々にあります。このような雪を土砂雪と呼んで赤雪などの着色雪と区別しております。

着色雪はいつ、どこでも見られるものではなく、積雪地帯で少なくとも、6月初期の頃まで残雪のある所に発生し、しかも氷雪の含水量、養分、光線、温度等ある特殊な環境条件が必要であります。また、氷雪植物の種類や有機物、鉱物質の含有により着色雪の色も異なり、血紅色、ピンク色、赤紫色、赤色、暗赤色、赤褐色、褐色、暗褐色、緑褐色、黄褐色、黄色、黄緑色、緑色、暗緑色、黒色の着色雪が発見されております。筆者の調査結果か



②赤雪を構成する氷雪植物(血紅色・ピンク色系赤雪)円形が氷雪植物、一目盛3.5ミクロン(600×)

長野県に於ける着色雪 (第1表)

産地名	標高(m)	着色雪の色
妙高山前山	1500	赤
雨飾国有林一帯	1000—2200	血紅、赤、赤褐、緑、暗緑、黒
桐池一帯	1500—2000	血紅、赤褐、緑
白馬乗鞍岳	2400	赤、暗褐、黒
白馬大池	2380	赤、暗褐、黒
小連華岳北尾根	2500—2700	赤、黒
白馬岳頂上雪渓	2730	赤褐、黒褐、黒
白馬岳御花畠	2550	赤
白馬岳小雪渓	2400	赤
白馬大雪渓	1600—2200	ピンク、赤褐、黄、黄緑、緑、黒
猿倉—白馬尻間一帯	1000—1600	血紅、赤褐、緑褐、緑
ヤリケ岳南尾根下雪渓	2500	血紅、赤紫、黒
唐松岳東尾根	2100—2500	血紅、赤褐、黄
八方尾根	1800—2000	血紅、ピンク
烏帽子岳	2600	赤
三俣連華	2800	赤
槍ヶ岳	3100	赤
穂高岳溜沢雪渓	2300	赤
木曾駒ヶ岳	2900	赤
志賀高原	1800	緑

着色雪の発生時期 (第2表)

着色雪名	発生時期
血紅色、ピンク系の赤雪	4月～7月中旬
赤紫色赤褐色系の赤雪	6月～8月
樹林内の緑雪、暗緑雪	5月下旬～7月上旬
黄雪黄緑雪、褐色雪	7月中旬～9月
黒雪(汚雪)	6月～9月

ら、長野県に於ける着色雪の分布及び種類を見ますと第1表に示した通りであります。

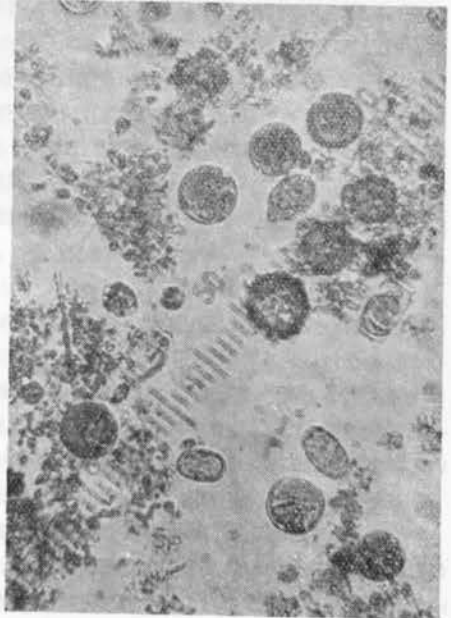
発生時期も場所や、着色雪の種類により異なりますが、大体第2表に示す通りであります。

血紅色、ピンク色系の赤雪は太陽光線の遮るものがない光の強く当る所によく見られ、他の着色雪よりも定期的に早く発生致しますので、汚れの少ない紛雪、ザラメ雪に見発されています(写真2を参照)。山岳地帯に発生したこの赤雪も7月に入れば、土砂が舞い込み、雪渓が汚れるに従い赤紫色や暗赤色系の赤雪に変わります。

次に、赤褐色～緑褐色系の赤雪は写真1で見られるように、前期の赤雪よりも光の弱い、オオシラビソなどの針



③ 緑雪を構成する氷雪植物、円形、楕円形は氷雪植物(600×)



④ 黒雪内に見られる氷雪植物、楕円形、円形は氷雪植物、細粒の固りは有機物(600×)

葉樹林内(桐池)やブナ林内(雨飾山、猿倉)それに霧のかゝる谷間の雪渓(白馬大雪渓)のベタ雪やザラメ雪に見られます。

緑雪は上記の赤雪よりも更に暗い針葉樹林や闊葉樹林内のベタ雪やザラメ雪に見られます(写真1、3を参照) 緑雪も有機物の含有量の有無により鮮緑色のものから暗緑色のものがあり、更に黒雪になっています。

又、土砂のごとき鉱物質が混入致しますと緑褐色、黄緑色、黄色の着色雪が現われます(大雪渓)。

黒雪、褐色雪は写真4に見るように、有機物や土砂の混入の多い着色雪に見られますので1名汚雪ともいいます

信州文学碑散歩

(10)

屋代高等学校教諭 福沢武一

白雄句碑 一上田市上田城趾一

きようは子供の日。妻子のお伴をして上田城趾へきた快晴に恵まれ、バスも、街も、ここ公園内も、行業の人で一っぱい。

まず博物館の縦覧。きり立った石垣が光線をはねっかえして、三つの楼はその上に白壁を光らせている。資料の展示されているのはこの中。

次に本丸を一巡し、高い土手の上で早屋にする。木陰が恋しい程日射が強い。土手の下にはサルスベリが裸のままの幹をてらてら光らせている。

自由行動に移る。これは家を出る時からの約束。白雄句碑拓本にかかるのは僕。土手の傾斜に、陽をまともに受ける碑。1メートルからある台石に、2メートル半の高さにそそり立っている。その金気のある自然石は見るからに堅い。心持磨きを当てた中央に、筆太に書きなぐってある。

鄙曇必興山子規 加舎白雄

四字目がむずかしい。舎と白と一字に書いているあたりも首をひねらせる。

アルス版「正岡子規全集」(12)によると、当句は一鄙曇り必ずよ山子規。なお碓氷峠にて前書をもっている。「万葉集」巻20の一歌が連想される。

ひなぐもり碓氷の坂を越したに

妹が恋しく忘れぬかも(4407歌)

ひなぐもりは日の隠(こも)りから碓氷の枕詞となっている。碓氷峠を越えただけでも、すでに別れてきた妻が恋しくてならず、忘れられはしない。これが歌意。句の方は次のように試解する。——ここ碓氷峠へくると、その度に必ず山ほととぎすか鳴いていることだ……。

碑蔭には、伊藤松宇氏の撰書が見られる。ここに引くならば、

正風中興の鼓吹者春秋庵白雄翁は我上田城主松平伊賀守の臣加舎忠兵衛の二男なり。藩中この俳傑を出たすまことに此地の誇りとす。而して、山子規の吟自ら当城趾の風物に適ふ。今茲に有志協力歌句碑を建て以て翁を記念し且つ将来の俳士を励ますと云う。

わずかに磨き落した上に刻字されてい、読解に苦しむ。日附は、大正8年。金さびの色が一面をおおって、古雅の趣きをつのらす。碑石の並でない点、書の豪放の点、日附の若さはさっぱり邪魔になってこない。

拓本の終わったところへ妻子が戻ってくる。動物園で楽しんできたところ。道具をまとめも一度博物館へ足をはこぶ。句碑のできた経緯をしりたくて。

館長清水氏の語るところによると、上田市神科の山崎家に伝わるミゴ筆の白雄真筆をここに復元したとのこと。ということは10年前聞いていながら、氏も実見していない。これを聞いて納得する。碑の豪快な筆致は毛筆でなかったんだ。だからあんなにそそり立ってるんだ。

なお、清水氏に碑句についての意見をたたく。氏は笑いながら述べられる。——必の次はなんという字だろうか、気にはなりながら、まだ決っていないんで……。とにかく白雄の筆蹟として見ればいいのであって、たとえ意味が汲めなくてもさしつかえがないのじやないですか……

なる程、そうした真理もあるんだな。なお、昭和3年「小泉碑文集」が出版されていることを教えられ、多謝して去る

道順で、動物園に立ち寄る。一番可愛いのは鹿。いま角を切り落す季節らしい。足もとの心もとない子鹿もいる幼い吾子に限らず僕も飼って見たい可愛いさだ。



今年 の 文化 祭

本年度文化祭は公民館、博物館、商工会議所などが中心になって11月1日～5日まで各会場で操りひろげられる第3会場(本館)では山岳展と合わせ写真展、美術展、染色展、スライドと映画会が開催される。山岳展の内容は岳人展、登山用具の変遷、登山史、登山基礎技術、登山医学、地図の見かたなどで、今回特別名古屋の石岡繁雄氏の好意により映画や小説で話題になった「氷壁」のナイロンザイル事件関係資料に期待が寄せられている。

紅葉の鹿島槍岳

宇佐美麗子



10月も半ばすぎた日曜日。日帰りで鹿島槍岳登山を計画した。初めは5・6人の女の子が集

てちょっとした山登りをやるつもりだったが、歩調が整わず、行かぬさきから落伍者があらわれ、最後に残ったのは私と1年後輩のKさんだけだった。どうせ行くなら鹿島槍をとという事になり「行けるところまで行きましょう」と話合う。

大町を自転車で出発した。途中で明るくなり出し、昨夜まで降った雨も今日はどうやら上るらしく、あちこちに少しずつ青空が見えてきた。やっと自転車を押し上げて来て止め、川のはたに腰をおろして流れる汗を拭くと遠くに鹿島の部落がちらりと見えて一安心する。川上の方はうすもやがかゝっているが、頭上の雲全体はばら色に染り山のむこうの太陽を思わせ今日一日の天候に希望をあたえる。2時間のアルバイト後、いさゝかお腹もすき朝食にした。対岸の濃い緑にまじってようやく色すき初めた紅葉はこゝまで来ただけでもよかったと思う。

大谷原で自転車を飯場らしき家に預ってもら。親切にも軒下を広げて入れてくれた。

大冷沢は奥へ入るほど紅葉黄葉を増し、一昼夜降りつづいた雨の後、つやつやした色を見ている。真夏ならばうす暗い林の中も黄葉でとても明るい。ほどなく西俣出合に着く。この紅葉は今が盛りで沢の両岸は紅、えんじ、燃えるような橙々、黄緑、黄と様々な色がひしめき合って河原の上に乗りに出している。上の方を見上げるとだんだんと葉が落ちて、尾根近くでは白い幹だけが立ち並んでいる冬の姿だった。高みより風に乗って木の葉がくるくる舞いながら後から後から落ちて来る。

季節はずれであまり人が入っていないと思っていた所この間に3組のパーティーに合った。昨日降りこめられて今日登るところだと云う。サブリュック一つの身軽な私たちは先に行かせてもらった。

いよいよ長ザクの登りだ。自転車で来たのが今になって身にこたえる。30分登って5分休むことにした。最初の30分の長かったことノ時計の針とにらめっこして登った。Kさんは私のすぐ後からついてくる。いや私が追われているらしい…。

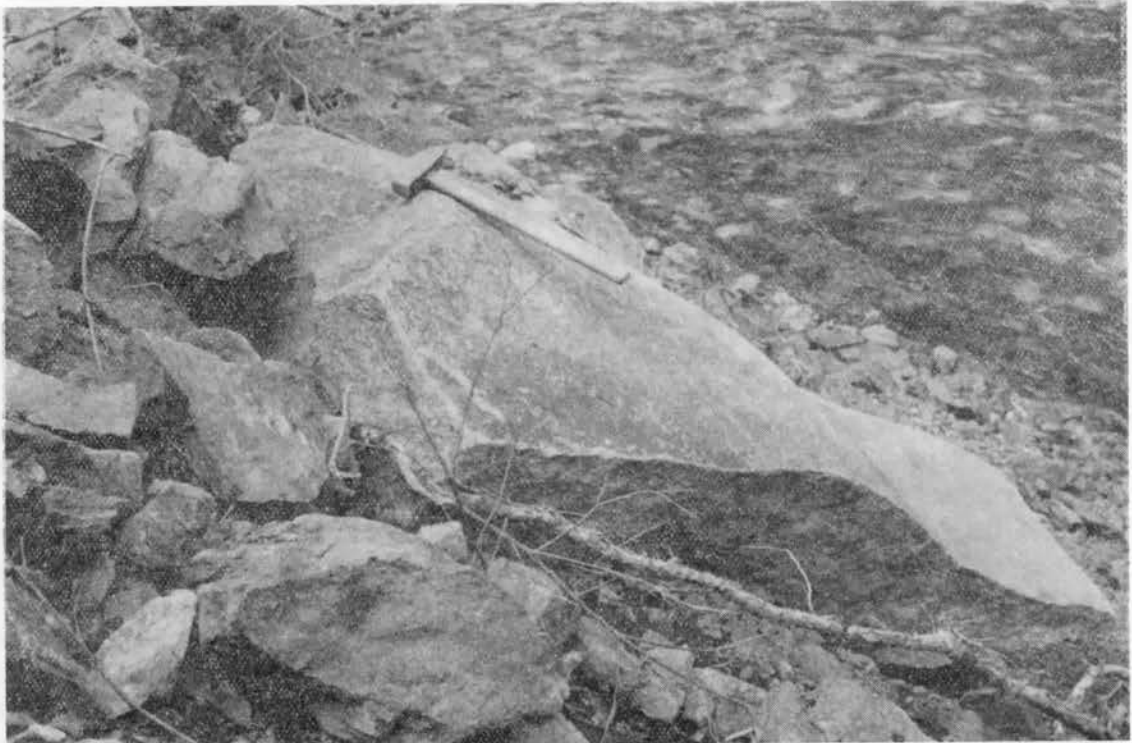
丁度見はらしの良い所へ出たので休んだ。大きなリン

ゴをほゝばると冷たい果汁が咽喉をうるおす。対岸の山はまるで赤と黄といくらかの緑の混り合ったジウタンを敷いたようだった。心機一転また歩き出す。山道にはらはらと落葉していかにも秋らしい。ときおり風が吹くと木の葉をふるわせてびっくりするほど大きな音をたてるそして踏みしめる落葉も茶色一色に変わり高く登ったことを感ずる。思ったより暑いので薄着になって歩いた。

高千穂平あたりから寒くなり風も強くなって来た。鹿島槍の頂上はどんよりと雪が停滞している。しかし東の方は晴れて、足下になった山々が望まれる。しばらく登ると大町が見えてきた。自転車で来た道を目でたどればずいぶん遠くほんとうによく来たなどと感じた。ようやく稜線に出た。さすがに風は強く吹き飛ばされそうだ。急いで冷小屋に向う。立山、剣の山々も峯は雲をかぶっているが荒々しい肌にもうずら新雪をつけて目前にそびえていた。小屋着11時10分。小屋には私たちより早く着いた人達、昨日雨の中を登った人達など7・8人いて薪が燃えており、外にはシラフなど干してあり、わりと賑かだった。ちよつと寒かったが思ったより早く着いたので少し休んで頂上へ行くことにした。

途中、らい鳥を2羽、3羽と見かけた。もう白と黒のまだらで白の部分はうぶ毛のように柔らかく、足などもフランネルのズボンをはいたようだ。近ずいても逃げようとせず、前をちよちよこ道案内してくれるかのように歩いた。中空には多くの岩燕が飛びかいた度西俣出合の河原の落葉を思わせた。布引を越えたあたりから霧がたちこめて来た。それが雪になったのだ。黒部側から吹き上げてくる雪はほゝをさして痛い。だがKさんと私はそれさえもうれしくてたまらない。元気よく登った。

鹿島槍岳の頂上雪と霧はで何も見えなかった。大きなケルンが3つも立っている。そして黒部側は新雪をつけて真白だ。一番大きなケルンのかげに風をさけながらうれしさに声をたてて笑った。2人でよく来たこと喜び合う。Kさんは三度目だと云うが私は初めてだ。大町から毎日見上げながら、いつかは登って見たいと憧れていた山である。大きな満足にしばらくはうっとりとしてケルンに凭れかゝっていた。時のたつのは早、何時までも居るわけにも行かず名残り惜しいが下ることにする。今度は正面から雪をうけ、手で顔を隠せば手袋をはめた手がかじかんでくる。どんどん走り下った。何時の間にか雪がみそれになり、小屋の辺りも煙っていた。火にあたりながら濡れたものを乾かし、お腹にも残ったものを詰め込む小屋にいた人達に別れをつけて帰路についた。Kさんに



今は昔語りのヘットナー石

——英雄の末路あわれなり——

○…南曇郡安曇村の島々の奥に明ヶ平（みようがだいら）というところがある。数年前までこの路傍に直径3mほどもある大きな花崗岩の礫があった。これがヘットナー石である。

○…1913年ドイツのハイデルベルグ大学教授アルフレッド・ヘットナーがこの附近を歩いた際に、この花崗岩の斜の条線に目を着けて氷河の堆石（たいせき）だといった。これがもとになって、日本の氷河研究者はこの岩をめぐる氷河論争をつづけたことがある。

○…信濃博物学会がこの石を「ヘットナー石」と名づけ天下に宣伝したので一時すっかり有名になってしまった。しかし実際にはかんたんにこの岩一個で氷河

を云々するのはおかしな話で、今では殆んど信用されていない。しかしながら、日本に氷河があったということをはじめた最初の手がかりとなった岩であるからそういう点では興味ある事であろう。

○…最近道路拡張のため、ハツバをかけられ、見る影もなくなってしまった。氷河堆石としては信用されなくても、氷河論の発端となった岩であるからせめて現地に保存しておいたらと残念に思うが仕方がない写真は「ヘットナー石」のざんがい。（田中邦雄）

四季とリとリ 【2】

先に歩いてもらおうと足が早く、半分走りながら後を追うのがせい一杯だ。ほとんど休まず一気に下った。

西侯出合に二つばかりテントが張ってありちよっと羨ましく思う。来年はぜひテントを担いで来よう一決した。後はなだらかな道なので気持ちよく歩が進む。歌も自然に口をついて出る。しばらく行くうち、Kさんが山ぶどうのあるのに気が付いた。山ぶどうは経験によりずっぱいものと決めていたのであまり気が進まなかったが、一粒食べて見るとよく熟れて割合甘い。さっそくザツク

を下して取りにかゝった。粒の大きな房が沢山ある。季節から行くともう遅いはずなのに……。

「あまり取ると熊に怒られるかな」と言いながら風呂敷に一杯集めた。気が付いて見るといくらかうす暗くなって来たようだ。あわてて包みを手にして歩き出す。黄葉が来た時と反対にだんだん緑色をおびてくるのがよくわかった。河原に出る頃には半月も顔を出し、今日一日の最後を飾ってくれた。

白馬岳8月中旬の植物 [下]

大町山岳博物館学芸委員 寺島虎男

△ミヤマキンポウゲの群落(黄花) △ハクサンイチゲの群落(白花) ・ウナギギク(黄色花)群落をなす
 ・タカネミミナグサ(なでしこ科白花) ・ミヤマコウゾリナ(きく科) ・エゾムカシヨモギ(きく科、淡紫花) △クロユリ(村営小屋直ぐ下の道路はたに見出す紫黄色)

⑧村営小屋から頂上までの間(主として西方旭岳寄の湿地帯内)

a. 湿地性お花畑の主なる要素

△イワイチヨウの群落(りんどう科、本拠は亜高山帯、全株多肉質、葉腎臓形で先が凹む 純白花)

△ハクサンコザクラの群落、一(さくらそう科、ナンキンコザクラ葉縁鋸歯二重花冠の筒部、ガクより明かに長い、紅花) シロバナハクサンコザクラの一個体だけが発見された(forma alba Hara)

・ヒメイワシヨウブ(ゆり科、葉線形扁平、純白花)
 ・ハクサンオオバコ(おおほこ科、葉の両面に葉毛生え、長さ5~6mm稀に10mmを越えることあり) △ムシトリスミレ(たぬきも科、食虫植物、濃紫花、低山帯以上高山帯まで分布、個体数少ない) △チングルマ群落(ばら科、純白花)

b. 尾根道側

・キバナシヤクナゲ(黄花) ・ハクサンシヤクナゲ(白花) ・トウヤクリンドウ(淡黄白) ・オヤマソバ(たで科、白花) ・エゾシオガマ(帯黄白花) △ヒメコゴメグサ(ごまのはぐさ科)

⑨杓子岳(2780m)まで(主として西側傾斜砂地)

・イワスケ(かやつりぐさ科、穂は3~5個、花の数少く暗紫色) △コマクサ——(主に道の右側、最近において土地の人が種子を播いてこゝまで繁殖させたと聞いてその労苦を思い益々保護の必要を痛感させられた。中には白花のコマクサも存在する由、forma alba Takeda) ◎雷鳥の姿を認めた——(親一羽仔二羽) ・オヤマノエンドウ(まめ科、紅紫花) ・イワオウギ(帯黄白花) △シロウマオウギ——(まめ科、A.shiroumensis Makino 白花、莢は青竜刀一室黒色假毛あり、◎まもなく星鳥(岳鳥)のダケカンパの枝にとまれるものを見出す。・チヨウノスケツウ(ミヤマグルマ)——(高山植物の珍稀品、矮少灌木、葉裏粉白、白花岩壁に僅少発見、須川長之助氏を記念して命名の種) ・イワヒゲ(シヤクナゲ科、純白花、茎長く横走して再三枝す) ・チジマゼキシヨウ(ユリ科、北方系、帯緑白花なれどここでは淡紅暈をおびる)

・タカネアオヤギソウ(ゆり科、湿潤地性、帯褐緑花) △ヒメコゴメグサ(Euphrasia Yabeana Nakai) 丈1~5cm、葉は扇形契脚、ガクの裂片は反捲する)
 ・リンネソウ(エゾアリドウシ) —ハイマツの下等に見出された、外面白内面淡紅花、Linnaea borealis Gronov) ・マルバギギシ(タデ科、一名ジンヨウスイバ、全株無毛、葉腎臓形、基部心臟形、多湿な岩礫地)

⑩ヤリガ岳(2,903m)

・ミヤマオトコヨモギ(きく科) ・ミヤマリンドウ(碧色、丈5~20cm、湿地性) ・ミヤマウシノケグサ(いね科) ・シキンカラマツ(うまのあしがた科、全株粉白、且紫彩あり、淡紫花) ・イワウメ(いわうめ科、淡紅花、岩壁或はハイマツの下)

⑪ヤリ温泉に下る途中

・コタスキラン(いね科) ・タテヤマウツボグサ(おどりこそう科、濃紫花)
 ・ミヤマヌカボ(いね科) △シロウマスケ——(かやつりぐさ科、茎の根元は鱗状化した帯紫褐色の葉鞘で包まる。頂部に4~6個の花穂をつける) ・シラタマノキ(しやくなげ科、矮小灌木、白花で淡緑暈花、全株にメチル、サリンレイトを含む) ・ミヤマアズマギク(紅紫花) ・ヒロハベンケイソウ(べんけいそう科、花) ・オヤマリンドウ(碧青花) ・オオバヨツバムグラ(あかね科、淡黄緑花) ・ミヤマホツツジ(灌木、しやくなげ科、帯緑白花で外部に紅暈あり) ・ヒメトラノオ(ごまのはぐさ科、丈90cm位、葉対性)
 ・クガイソウ(全上、1cm内外、紅紫花、5~6葉輪生) ・ハナヒリノキ(木、しやくなげ科、淡緑の壺状) ・キバナカワラマツバ(あかな科黄花) ・イトキンズゲ(かやつりぐさ科) ・ヒトツバヨモギ(きく科、一名、ヤナギヨモギ、適潤地を好む) ・ハクサンコザクラ(紅紫花) △シロウマアカバナ——(あかはな科、丈5~30cm単一、鮮紅花、莖長さ2~5cm、北海道(大雪山)白山、御岳、上高地等に分布) ・ハナニガナ(きく科、黄花) ・シロバナニガナ(きく科、白花) △(チヨウジギク(一名クマギク、長梗に白毛密、黄花) ・キンレイカ(一名ハクサンオミナエシ、おみなえし科、鮮紅花) ・ウラジロナナカマド(木、葉縁2分の1~3分の1鋸歯なし、裏面粉白、白花) ・ネバリノギラン(つるぼらん科、淡黄褐色)

⑫ヤリ温泉より猿倉まで(ほとんど雨中の観察)

・シロバナホタルブクロ(ききょう科) ・クロバナヒ

キオコシ(おどりこそう科、黒紫花) 湿地帯あり・ミズバショウ(さといも科、無茎、花後に葉を生ず、白花) Δイワイチヨウ群落・ミツガシワ(一名ミズハンゲ、りんどう科、白花時に淡紅彩あり)・オオウバユリ(淡黄緑花)・ノハナシヨウ(あやめ科、赤紫花)・オガラバナ(木、かえで科、黄緑花、翅果鋭角)・ホザキカエデ(一名オガラバナ、黄緑花、花序総状)・タチコメゲサ(ごまのはぐさ科、白色淡紫色をおびる)・ツルニンジン(ききよう科、白緑花)・コイワカガミ(いわりめ科、淡紅花)・タカネガナ(黄花)・イブキジャコウソウ(おどりこそう科、紅紫花)

)・ソバナ(ききよう科、紫花)

見落しが相当あろうかと思うがとにかく開花中の種が約130を数えられた訳である。白馬岳の全植物数が約420種とすれば凡そ31%に該当している。最盛期を過ぎた感がある。千葉生物会の方々が白馬において一通りの高山植物が見られたり、珍希品にも若干接することができて目的が相当に達せられたのではないかと思考された。
前号訂正 11行目 列筆は列挙 ②の項11行目しゆろそう科はしゆろそう科 ④の項 1行目Δソバトリカブトはソバトリカブト 22行目シヤマカラマツはミヤマカラマツ ⑤の項 9行目鬚毛は鬚毛

モズ

長沢修介

秋の訪れを感じさせる鳥の沢山ある中に最も早く又身近にいるものはモズであろう。

9月の中頃から高い木の梢で声高らかに鳴くモズの声は秋の声を知らせる第一声である。又晴れた日、黄ばみ始めた柿の木の梢などで高らかに鳴いているモズの声を聞くと秋深しの感にうたれる。この様に美しい秋の風景も自然の神の定めたきびしい掟の中から生れるのである。モズは留鳥で周年ほとんど同一地方に棲んでいて他の小鳥達と違い繁殖期以外でも雌雄又は単独で生活することが多い。そして繁殖期に或一定の地域を占有する他と小鳥達と反対に主食である動物質の少ない秋冬に自分の領域を守る習性が強い。この主食の欠乏期の初めにあたる秋の初めに高啼きをするのである。まず自分の良いと思う地域を見つけると高い木の梢にとまって四方を見ながら高らかに叫び誇示する。そうすると近くにいた他のモズもこれに応ずるかの様に負けじとはかり梢にとまり高らかに誇示する。

やがてこの二羽はもつれ合い烈しく闘争して強弱を競う。そして負けた方は他の地域を見つけに去る。一方勝った優者は勝った事を高らかに宣言すると同時に自分の

新しい領域を誇示するために高らかに鳴き叫ぶのである。この様にして得た自分の領域を守るため高い木の梢から梢へと高らかに鳴き歩き冬季の棲息地にここを定める。棲息地が定まると闘争をやめそこに定住す。

又モズはこの高啼きの終る10月頃からハヤニエを作る習性がある。これはトカゲ、ケラ、バッタ、イナゴ、トノサマガエル、アマガエル等を捕えてカラタチ、ガマズミ、ハンノキ、タケ、ノイバラ等の刺や小枝に小動物を突刺して殺しておくのである。このハヤニエは雪の沢山積つた時食べるといふ説もあるがはっきりしない。この他にモズは雪の降り続く日などズメやシジウカラ等の小鳥を襲って食べることもある。



登山用具を寄贈

ピツケル製作で知られる札幌の門田茂氏の好意で登山用具を寄贈して下さることになった。10月初旬本館を訪れ用具の内容について話合った結果、ピツケル、アイゼンの製作過程を示す標本、アイスパイル、ロックハンマーなど20点の資料が11月中旬に送付される。

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料177円(郵送料とも)を現金書留または郵便替論、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。
大町山岳博物館

編集後記 不順な天候で、農家をなかせた今年の秋もやつと本格的な秋空を思わせるこの頃。その下に動力機械の音高く響き、遅れた作業の挽回に一生懸命だ。北アルプスも冬化粧を終り、山麓の朝夕は実に寒い。山岳では冬山、スキーシーズンを間近に控え、準備とトレーニングに、地元はその受入やら…観光冬の陣が始まつた

山と博物館 第3巻第10号 1958年10月20日発行
発行所 長野県大町市TEL(大町)211
大町山岳博物館
印刷所 松本市巾上町353
信州印刷株式会社